

文化・芸術

「コップを持つ子ども」

1942年12月、鉛筆、コンテ、墨、紙
34・8号×27・2号（個人蔵）

松本竣介（1912〜48年）

自分の顔ほどある大きなコップをつかみ、その重みを支えるあどけない手の表情が印象的な作品です。

早くから子どもをモチーフにした絵画を描いてきた松本竣介は、子どもを描くことは、自身の絵の甘さを正すためと述べていました。

竣介は4人の子どもの父でもありましたが、長男と長女をいずれも幼くして亡くしています。描かれる少年像は、1939（昭和14）年に生まれた次男・莞をモデルとした作品が多く、とはいえ、アトリエに座らせてポーズをとって、という類のモデルではありませんでした。子息の日常的な表情をイメージの源泉としつつ絵画化しています。そこには普遍的な小児像としての完成度を感じられます。戦時下、父と子とともに過ごす時間は限られたものでした。竣介は、幼児期の莞との時間をその画面に凝縮させるかのように、数多くの少年像を残しています。本作はその代表作といえるでしょう。（小此木）

〈名画の扉〉

大川美術館企画展「生誕110年記念
松本竣介デッサン50」から

